

四段・終

四段・命

兼平一人**候ふ**とも、余の武者千騎と**おほしめせ**。矢七つ

④今井↓木曾殿

⑤今井↓木曾殿

四段・已

四段・未 意思「む」終

八つ**候へ**ば、しばらく防ぎ矢**つかまつらん**。あれに見え

① 四段・体

④今井↓木曾殿

下二・用

補助動・四段・用

四段・体

四段・命

候ふ、粟津の松原と**申す**、あの松の中で御自害**候へ**。」

① 四段・体

④今井↓木曾殿

とて、**打つて行く**ほどに、また新手の武者、五十騎ばかり

四段・用・促音便

とて、**打つて行く**ほどに、また新手の武者、五十騎ばかり

完了「たり」終

尊敬「す」用 補助動・四段・命

り**出で来たり**。「君はあの松原へ**入らせ**たまへ」。兼平はこ

力変・用

四段・未

⑤今井↓木曾殿

補助動・四段・未

四段・用 過去「けり」已

四段・用

のかたき**防ぎ候はん**。」と**申し**ければ、木曾殿の**たまひ**

四段・用

④作者↓木曾殿

⑤作者↓木曾殿

過去「けり」体

当然「へし」用 完了「つ」体

けるは、「義仲、都にていかにもなるべかりつるが、これ

四段・終

まで**逃れ来る**は、なんぢと一所で**死なんと思ふ**ためなり。

力変・体

意思「む」終

断定「なり」終

とところどころで**討たれん**よりも、ひとところ**こて**討ち

受身「る」未

四段・未

係助

死にをも**せめ**。」とて、馬の鼻を**並べて駆けん**とし**たまへ**

意思「む」已

意思「む」終 補助動・四段・已

サ変・未

下二・用 下二・未

サ変・用

ば、今井四郎、馬より**飛び下り**主の馬の口に取りついで

サ変・未

⑤作者↓木曾殿

四段・用 過去「けり」体

④作者↓木曾殿

四段・已

完了「つ」已

四段・体

四段・用 過去「けり」体

申しけるは、「弓矢取りは、年ごろ日ごろいかなる高名

四段・已

完了「つ」已

四段・体

候へども、最後のとき**不覚**しつれば、長き疵にて**候ふ**

① 四段・体

サ変・用

断定「なり」終

尊敬「さす」用

四段・用

補助動・四段・終

なり。御身は**疲れさせ**たまひて**候ふ**。続く勢は**候はず**。

下二・未

⑤今井↓木曾殿

① 四段・未

打消「ず」終

受身「る」未

四段・用

四段・用

四段・用

かたきに**押し隔て**られ、言ふかひなき人の郎等に**組み落**と

受身「る」用

下二・未

形・ク活用・体

四段・未

尊敬「さす」用 四段・用 受身「る」未 尊敬「さす」用 完了「ぬ」未

されさせ**たまひ**て、**討たれさせ**たまひなば、『さばかり

受身「る」未

⑤今井↓木曾殿

四段・未

四段・用

尊敬「さす」用

四段・用

⑤今井↓木曾殿

四段・用

日本国に**聞こえさせ**たまひつる木曾殿をば、それがしが

下二・未

⑤今井↓木曾殿

完了「つ」体

補助動・四段・用・促音便 完了「たり」体 四段・未 婉曲「む」体

四段・用

④今井↓木曾殿

係助

郎等の**耐ち**たてまつたる。』**なんぞ申さん**こと**こそ**くち

補助動・四段・已

④今井↓木曾殿

尊敬「す」用 四段・命

四段・用

を**しう**候へ。ただあの松原へ**入らせ**たまへ。」と**申し**け

補助動・四段・已

④今井↓木曾殿

⑤今井↓木曾殿

④作者↓木曾殿

形・シク活用・用・ウ音便

れば、木曾、「さらば。」とて、粟津の松原へ**駆**けたまふ。

過去「けり」已

下二・用

⑤作者↓木曾殿

兼平一人でございまして、他の武者千騎とお思

い下さい。矢が七、八本ありますので、しばらく

矢で防ぎましょう。あちらに見えますのは、

粟津の松原と申ます、あの松の中でご自害くだ

さい。」

と云って、馬にむち打って行くと、また、新手の

武者が五十騎ほど

現れた。「殿はあの松原へお入りください。兼平は

この敵を防ぎましょう。」と申し上げたところ、

木曾殿がおっしゃったことには、

「義仲は、都で討ち死にするつもりであったが、

ここまで逃れ来たのは、お前と同じ場所で死のう

と思つたからである。

別々のところで討たれるよりも同じ場所で討ち死

にしよう。」と云って、馬の鼻を並べて走り出そう

としなされたところ、

今井四郎は、馬から飛び下りて、主君の馬の口に

取りすがって

申し上げたことには、「武士は、常日頃どのような

武名が

ございまして、最期のときに失敗をしまして

と、長きにわたる恥となつてしまいます。

お体はお疲れなさつてございます。あとに続く

味方の軍勢はございません。

敵に（私たち二人の間を）押し隔てられ、取るに

足りない人の家来に（馬から）組み落とされ

なさつて、お討たれなさつたならば、『あれほど

日本中で名声が知れ渡っていらつしやうた木曾

殿を、

だれそのの家来が討ち申し上げた。」などと申す

ことが残念でございます。

ただもうあの松原へお入りください。」と申し

上げたので、木曾殿は「それならば。」と云つて

粟津の松原へ馬を走らせなされた。